THE RECORD GEIJUTSU 準 特選盤

■リスト／4手ピアノ編曲集

〔①死の舞踏②マゼッパ③フン族の戦い④前奏曲S.591〕
露木智恵，ミヒャエル・ローゼンボーム(p)
[オドラデク・レコーズⒹODRCD329]
オープン価格

濱田滋郎●Jiro Hamada

準 「交響詩」のジャンルを率先して作曲し、確立せしめたことも、フランツ・リストの目立った功績のひとつである。生涯に彼は、つごう13曲もの交響詩を書いたが、中で現在、私たちがふだん耳にできるものは残念ながら少ない。さらに、リストが何曲かの交響詩をピアノ4手用に自ら編曲していたという事実を知る人は、もっと少なかろう。ドイツ人のミヒャエル・ローゼンボームと日本人の露木智恵は後者のドイツ留学中に相知り、人生のパートナー同士になると共に、2009年からピアノ・デュオを組み活動するようになった。当ディスクには、右記のような次第でこんにち聴く機会も稀なリスト自編の連弾版交響詩3篇――《マゼッパ》《フン族の戦い》《前奏曲》――と、これは本来、交響詩ではなくピアノと管弦楽のための標題つき小協奏曲である《死の舞踏》が収められている。もとよりこの《死の舞踏》も連弾用編曲、そしてこのアレンジが、リストによってではなく、演奏者たちによって行なわれたこともひとつの値打。冒頭に置かれた《死の舞踏》は、音楽史上さまざまに使われて耳に親しいグレゴリオ聖歌〈ディエス・イレ（怒りの日）〉にもとづく作品で、変奏曲をなしているため把握しやすい。交響詩《マゼッパ》は、《超絶技巧練習曲集》中の同名曲と、モティーフ上の共通性を持つ。最後の、ラマルティーヌの詩に基く《前奏曲》は周知の有名作品。すべてにわたり、2人の演奏は、よく曲趣を生かした周到なものとして傾聴できる。ネッラ〉にはより軽やかさを求めたい。《コンソレーション》第3番のフレージングも洗練されている。《ハンガリー狂詩曲》第6番が面白い。シンコペーション等リズムの切れがよく、各部分のテンポの推移など表現の変化が明快で聴かせる。

石田善之●Yoshiyuki Ishida

[録音評] 4手ということもあってか常に低音部のギヤーが全体のスケールしっかりとしたエネルギー感演奏の厚みを伝える。タジオでの収録だが，残響成分も比較的長めでそれがしなやかさや柔らかさにもつながっている。特に強い個性は持たず自然な印象。*ff*では独特の迫る純度の高い響きとは異なった感じさせる。〈90〉

那須田務●Tsutomu Nasuda

推薦 今月は《幻想交響曲》のリストによる1台ピアノ用編曲版がリリースされたが、こちらはリストの交響詩の4手連弾版を、ドイツのハノーファーで結成された露木智恵とローゼンボームによるデュオが弾いている。1曲目の《死の舞踏》は言うまでもなく、グレゴリオ聖歌の〈怒りの日〉を基にしたパラフレーズで原曲はピアノと管弦楽。当然ながらピアノ独奏版よりも音数が多く、サウンドが厚くて密度が濃い。今回の録音は「デュオ・露木&ローゼンボームの編曲」になっている。通常のピアノの演奏に加えて、骸骨の軋みのようなギシギシとした打楽器的な効果音が随所に聴かれてとても興味深い。4手であるうえに、彼らのピアニズムがドイツ流の重みのあるタッチということもあって、サウンドは重厚。《マゼッパ》はピアノ練習曲集の1曲として書かれ、その後管弦楽版とピアノ版の改訂版（《超絶技巧練習曲》）が作曲され、最後にピアノ連弾版（S594）が成立するという複雑な経路を辿る。この曲に限らず、リストは既存の作品を編曲するたびに、目的の楽器や編成に合わせて曲を書き換えるので、違う作品と言っていい。だから自立した作品として鑑賞するべきなのだろう。《フン族の戦い》は巧みな劇的構成で起伏に富んだ作品の魅力が味わえるし、《前奏曲》も変化に富んだ詩的な情感が真実味をもって示される。